

『長尾景春と鉢形城』

日時：平成 25 年 11 月 10 日(日)

午後 1:30～3:30

場所：鉢形城歴史館 講座室

講師：黒田基樹先生（駿河台大学教授）

【講演】

<ご自身の研究分野などについて>

みなさんこんにちは。ただ今ご紹介いただきました黒田と申します。これから 2 時間弱お話をさせていただきます。

ご紹介いただきましたように、私は基本的には小田原北条氏の研究をしています。その中で、北条氏以前、西関東では上杉氏の時代も勉強する必要がありましたので、早くから研究を始めました。

特に太田道灌や、その主家の扇谷上杉氏（おおぎがやつ うえすぎし）の研究については、史料が限られていて中々本格的に扱う研究者が増えないという状況ですので、今でも色々な所で呼んでいただいています。

<主要参考文献について>

3 頁目に今日の話の主要参考文献を挙げておきました。

今日の話に直接関わるようなものに限って挙げてあります。

2004 年に『扇谷上杉氏と太田道灌』、その 5 年後に『図説太田道灌』という本を出し、その後、太田道灌と並び立ち、道灌の生涯の中でも大変重要なウエイトを占める武将「長尾景春」について、3 年前に『長尾景春〈シリーズ・中世関東武士の研究 1〉』という本を出すことになりました。今のところ長尾景春という書名のついている研究書というのはこれが唯一のものになると思います。

その長尾景春は、山内上杉氏（やまのうち うえすぎし）の家臣でしたから、長尾景春を検討するということは、同時に山内上杉氏を検討することになりますので、その研究を進め、今年研究書ですが『戦国期山内上杉氏の研究』という本を出版しました。

北条氏を中心に研究を始めたのですが、現在は、山内上杉氏や扇谷上杉氏という両上杉氏の時代から、北条氏の時代になるという、そうした関東の戦国時代全般を扱うような状況になっています。

<鉢形城歴史館の企画展について>

今日は「長尾景春と鉢形城」ということで、この鉢形城を築城した長尾景春という存在がどのような人物だったのか、あるいは鉢形城の築城や、その後の鉢形城をめぐる攻防など、長尾景春の段階の鉢形城についてお話をさせていただきたいと思います。

ちょうど鉢形城歴史館で「長尾景春と鉢形城」という展示が行われていますが、長尾景春が冠に付いた歴史の企画展示というのは初めてのことです。

しかもこの春には、長尾景春の主人で、景春を鎮圧した後この鉢形城に入ってくる上杉顕定（うえずぎ あきさだ）という人を冠に付けた展示が行われています。これはまさに画期的なことと言っていいと思います。

今までの関東の政治、戦国史の中で、上杉顕定や長尾景春というのは一般的には非常にマイナーな存在だったのですが、研究の世界では非常に有力な人で、その時代を理解する上でのキーパーソンになるような非常に重要な人物なのです。しかし、一般には本も出ていないということもあって中々伝わっていませんでしたが、今回ここ（鉢形城歴史館）で顕定や景春を対象にした企画が行われたというのは、これまでの研究成果の進展の反映とみることができるということから、非常に嬉しく思っています。

今後も景春や顕定といった存在が取り上げられていくことによって、この鉢形城の歴史的な性格や、どのような役割を果たしていた場所だったのかということなどが、更に明らかになっていくことに繋がるのではないかと思います。

そして私はそのためのささやかなお手伝いとして、今日は、そもそも鉢形城を築いた景春という人が、どういう存在、どういう立場の人なのかということをお話して、その上で鉢形城が構築される「長尾景春の乱」がどのような性格のものだったのか、といったことについて話しをさせていただきたいと思います。

I 長尾景春の政治的立場

<長尾氏の系譜>

まずは、長尾景春という存在、レジュメ 4 頁目に長尾の系図を掲げておりますのでご覧ください。

右から二列目に景仲—景信—景春—景英という系統があります。この中に景春という人がいて、父が景信（かげのぶ）、祖父が景仲（かげなか）という人です。

景仲の右脇に「(白井)」(しろい)と入れてありますが、これはこの家系が通称として「白井長尾氏」といわれていることに拠っています。白井というのは群馬県の白井城ですね。沼田の南辺りにあります。ただ、この家系が実際に白井長尾氏と呼ばれるようになったのはいつかというのは、実はよく解っていません。

景仲の時に白井を本拠にしたということが、江戸時代以降いわれているのですが、当時の資料を見ていきますと、必ずしもそのように考えることはできない状況がありまして、確実に白井を本拠にしたのは、景春の子供の景英（かげひで）からになります。

おそらくは景春までは白井を本拠にしてはいなかったと現在私は考えていますので、(白井長尾氏というのは) 戦国時代の呼び方というふうに理解しています。

その他にも景春の叔父さんの忠景（ただかげ）の所に「(惣社)」(そうじゃ)と書かれていて、これも「惣社長尾氏」といい慣わされているのですが、実際にこの系統が惣社（群馬県前橋市辺り）を本拠とするのは孫の代位からしか確認できません。おそらく「白井長尾氏」「惣社長尾氏」というような言い方というのは、基本的には戦国時代の

呼び方になって、景春の段階ではそのような呼び方はなかっただろうと考えています。

それなので最近私は、代々の通称をとってそれらの家系について呼称するようにしています。例えば景春の家系についていいますと、この家系は代々「孫四郎」という通称を名乗るのですね。ですからこれを「孫四郎家」と呼んでいますし、景春の叔父に当たる忠景は、別の家を継いでいるのですが、その家は代々「尾張守（おわりのかみ）」を名乗るので、これを「尾張守家」と呼ぶようにしています。

中々「何々家」という言い方に馴染みがないかもしれません。徳川であれば、例えば「尾張家」「紀伊家」「水戸家」のような言い方になるのですが、住んでいる場所ではなく代々の通称で呼び表すということですので、ご理解ください。

<上杉氏の系譜>

5 頁目の系図が「上杉」です。

景春の長尾氏というのは、上杉氏の中でも「山内上杉氏」という家系の家来になります。（系図を指し）ちょうど真ん中のこの系統が山内上杉氏の家系ということになるのですね。そして景春と直接対決する主人の顕定というのがここに書かれています。

これが景春にとっての主人の家系で、この家系は代々「関東管領」（かんとうかんれい）という役職を努めていました。

室町時代において関東は、室町幕府の支配ではなく、室町幕府と兄弟関係にあって、足利氏の一族が将軍のような立場で管轄をする「鎌倉府」という政権が、文字通り鎌倉を本拠に置かれていました。

そのトップが「鎌倉公方」（かまくらくぼう）という足利氏の有力な一族になります。

そしてその補佐役を「関東管領」といっております。関東管領は全て上杉氏の一族に占められていたのですが、途中からは山内上杉氏が代々努めるようになりました。

ですから景春の主家の山内上杉氏というのは、関東でナンバー2 の家系に当たります。ナンバー1 が将軍に当たる公方、足利氏。その補佐役に関東管領という形です。

そのナンバー2 の山内上杉氏の宿老家が「長尾氏」ということになります。長尾にもいくつかの系統があります。ここら辺は同じ苗字の家が幾つもあるので混乱するのですが、景春を理解する上では予めそういったことについて把握しておく必要があります。

一つの有力な家系はこの景春の家系ですね。もう一つ有力なのが、景春の叔父さんが継いだ家系、尾張守家と呼べるような家になります。もう一つ、景春の時代になると「(足利)」と注記が入っている家系で、戦国時代になってから下野（しもつけ）の足利（栃木県）に本拠を置く一族が出てきます。この家系が元々の長尾氏の嫡流だったのですが、戦国時代のある時に少し没落をしていて、後で復活してきたということです。

この三つの家系が長尾氏の中の有力な家系ということになります。後で取り上げる景春の乱の中でもこの三つの家系というのが出てきますので、その時には再び注目してください。

<景春の経歴>

それでは1 頁目に戻りまして、具体的に話を進めていきます。

まずは景春というのが政治的にどういう立場の人間だったかということです。

景春は嘉吉3年（1443）の生まれと推定されています。これはまだ確実ではないので

すが、後世の史料の死去年と享年という記録からの逆算ということになります。当時の史料で年齢がわかっているわけではないのですが、動向からみていくと概ねその程度ではないかと考えられるので、嘉吉3年生まれということを採用しています。

山内上杉氏の家宰（かさい）という役職を務めた、長尾景信（かげのぶ）の嫡男。家宰については後ほど取り上げます。

母親は越後の長尾氏。越後にも上杉氏の一族がいて、その宿老にやはり長尾氏の一族がいるのですが、長尾頼景（よりかげ）という人の娘と推測されます。

叔母婿（父の妹の夫）に太田道灌がいるという関係になります。景春は道灌よりも11歳年下の関係、一回り近く下の次の世代の人間と言っていいかと思います。

翌年の文安元年（1444）に祖父の長尾景仲が山内上杉氏の家宰に就任します。この家系が山内上杉氏の家宰に任命されるのはこの景仲が最初です。景仲というのは、長尾氏の一族の中では庶流（傍流）の一つでした。先程言いましたように足利長尾につながる家系というのが嫡流で、その弟に当る系統がそれに次ぐ有力な一族だったわけですが、それ以外の家系から山内上杉氏の家宰に就任したのは景仲が最初になります。

これは当時景仲が長尾氏一族の中で長老的な存在であったということが関係していたと思います。上杉氏の系図をもう一度ご覧ください。顕定の先代が房頭（ふさあき）、ここへ顕定は養子で入ります。そのお兄さんに憲忠（のりただ）がいて、その父が憲実（のりぎね）です。この憲実という人が色々あって政治的に引退してしまいます。憲実は自分の子供は後継ぎにしないと政治的に引退をしてしまうのです。

しかし残された家臣達はそれでは納まらず、勝手に憲忠を擁立するのですね。そして憲忠に山内上杉氏の家督を継がせる。その立役者が景仲だったのです。景仲は新しい当主憲忠を作り出した人間として、家宰に就任するということになります。これについては今後も研究を進めなければいけないのですが、とりあえず景仲は、山内上杉氏の当主を擁立するという形で政治的に台頭してきたことになると思います。

その後、享徳4年（改元して康正元年1454）、景春が生まれてから11年後の正月から「享徳の乱（きょうとくのらん）」という戦乱が展開します。これが関東戦国時代の始まりに当る戦乱ということになります。京都では12年後に「応仁・文明の乱」が始まります。関東が戦国時代に突入するのは、それより12年も早かったことになります。

享徳の乱の直前、景仲は色々あって一旦家宰の地位から退いていたのですが、乱の展開を機に再び家宰に就任して、以後山内上杉氏については景仲がこの戦乱を主導していく形になります。

室町時代の関東支配の在り方として「公方足利氏」「管領上杉氏」というコンビで統治をしていたということを取り上げたと思うのですが、享徳の乱は公方の足利氏と管領の上杉氏の全面戦争ということになります。

その対立はそれ以前からもあったのですが、結局この乱をきっかけに、公方足利氏も管領上杉氏も鎌倉からいなくなってしまう。鎌倉にいて公方と管領が協同で関東を支配していたのが鎌倉府の体制だったので、鎌倉から両方いなくなってしまう、その両方が戦争するという事なので、このことが室町時代秩序の崩壊を招いたということになります。そして結局その秩序というのは再建されないで、そのまま戦国時代に展開

していくということになります。

長禄 2 年 (1458)、この頃から管領上杉氏方は武蔵の五十子 (いかつこ) を本陣とするようになっていきます。6 頁目の地図をご覧ください。鉢形がすぐに見つかると思います。鉢形の北に五十子と書かれていると思いますが、上杉方はここを本陣にします。

対する足利方が本陣にしたのは茨城県の古河という所になります。それなので足利氏はこの後「古河公方」と呼ばれるようになるのですが、足利方は古河を拠点にして上杉方は五十子を拠点にしてそれぞれ対峙し、大よそのところ、東関東が足利方、西関東が上杉方の勢力圏になっていくというような形になっていきます。

寛正 2 年 (1461) 4 月。この頃に景仲は嫡男の景信に家宰職を譲っています。世襲していくという姿勢を示したということですね。景仲は上杉方の事実上のリーダーでしたので、その役割を息子に受け継がせるということになりましたので、この孫四郎家は二代に渡って家宰職 (しき) を務めるという家系になりました。ですから山内上杉氏の家臣の中では最有力の存在になります。

そして 2 年後祖父の景仲が死去しまして、山内上杉家は景春の父親の景信をリーダーとして展開していくことになります。

景春の活躍が見られるようになるのは、応仁元年 (1467) からのことになります。嘉吉 3 年生まれですと 25 歳にあたります。祖父以来代々受け継がれている仮名 (けみょう) の孫四郎を名乗っています。

景春の奥さんは上野 (こうずけ) の国衆 (くにしゅう)、群馬県沼田を本拠としていた独立的な領主である沼田上野守の娘と推測されます。沼田景泰 (かげやす) という人の姉妹だろうと考えられています。

文明 3 年から官途名 (かんとめい) という名乗りを改めまして、四郎右衛門尉 (しろうえものじょう) という名前で見られるようになります。

今私達は名前を一つしか持っていませんが、当時の人の名前の呼び方というのは、一つではありませんでした。長尾景春の場合は景春というのは実名 (じつみょう) という本当の名前。実の名と書いて実名という本当の正式の名前になります。実名は正式な際にこの名乗りで署名をしたりするというようなものです。但し、当時は人の実名を口にするとというのが憚られたのです。

実名というのは、基本的には親しい間柄といますか、面識のある間柄でしか明かされませんので、関係ない人は知らないのですね。有名人になると実名が知られてくるのですが、普通は知られません。それともう一つ、この実名は祈祷の対象になります。祈祷の対象となるということは当然呪いの対象になるということなので、簡単にはその実名は明かさないのでですね。呪いの対象にもなるので、実名で相手を呼ぶことが憚られるということから、代わりの名前を付けて呼びました。

まず仮名 (けみょう) というもの。仮の名ですね。実名に代えて仮に呼ぶ名前。この仮名が景春の場合は「孫四郎」でした。元服して成人後に、孫四郎の仮名と実名景春を名乗るわけですが、普通は孫四郎と呼ばれているということになります。

更にある程度の政治的・社会的な地位になりますと、この仮名という名乗りから官職名に基づいた名乗りに改めます。それが「四郎右衛門尉」という官途名で、これも代々

景仲の家系が名乗っているものになります。

文明5年6月に父親の景信が死去してその家督を継いだことで孫四郎家の当主になりましたので、それまでの四郎右衛門尉から更に四郎を外しまして、単に「右衛門尉（えもんのじょう）」と名乗っています。以降、景春はこの官途名を名乗っていくということになります。

<家宰という政治的地位>

父親の景信の死去で問題になったのが、景春の家系が山内上杉氏の家宰を代々務めているということです。景信が死去した後、当然景春は家宰の有力な後継候補だということがわかんと思います。景仲・景信と二代に渡って受け継がれてきましたので、景信が死亡した後、当然その子供の景春が、多くの人にはそのまま継ぐだろうと思われていたわけです。

ここで、家宰というのがどういう立場なのかということなんです。

家宰は、主家の家務、ここで主家というのは山内上杉氏に当たります。山内上杉氏の家政を取り仕切り、家を存立していくためには、家来の統括や収入の確保というような様々な仕事があるわけですが、そうした主家の家務を主人に代わって統括するということが一つの立場です。

もう一つ、山内上杉氏は公的な立場として、例えば上野国の支配や、武蔵国の支配という役割を果たしていたのですが、そこでも主人に代わってそれを代行するという仕事を行っていきますので、当主の代理人という立場があります。

それともう一つは、家来の中の代表者であるという立場です。家来から当主に対して何らかの要求がある場合には、全て家宰を通して要求され、逆に、主家の決定というのは全て家宰を通じて家来や領民に通達されます。

ですから、事実上主家の決定というのは、この家宰が判断するということですね。

景仲が憲忠を擁立する。そうすると、新しく擁立された憲忠というのは景仲の言い成りだったというのはよくわかりますよね。

この時の山内上杉氏の当主の頭定は越後上杉氏から養子に入ってきたのですが、これを主導したのは景信です。ですから頭定は景信の家に対しては、当然頭が上がらないという状況が生じていると考えられます。

何れにしても山内上杉氏という組織が何らかの決定をする場合には、この家宰という人の判断が、事実上それを決定していたということになります。

主家に対しての要求というのは全て家宰を通じて上申されますし、主家の決定というのは全て家宰を通じて通達されますので、主家の行動を事実上牛耳っていたのが家宰であるということです。

その具体的な内容は、例えば主家による所領の宛行い・安堵。宛行いというのは与えるということ、安堵というのは領有しているものを保障する、そのまま承認するという行為。家来は主人から所領を貰ったり、今持っている所領を認めてもらったりという形で主従関係を確認しますから、主従関係を形成する具体的な行為になります。それから山内上杉氏が支配をしている地域に対して、様々な税金を課すという行為。あるいは逆にその免除。この寺に対してはこれを免除するというような特例扱いという行為。それ

から他家、山内上杉氏と別の家との間の様々な権益を巡る交渉。こういったものを全て家宰が主導して行うということになります。

家宰にとってみれば同僚にあたる主家の家来、それに対して主家が所領を与えたり、承認したりする行為は、実は家宰の判断で行われていて、それを主家そのまま認めるということだったのです。それから税金をかけたり免除したりというのも家宰が事実上取り仕切っていたということです。

そういった所から家宰は「家務の統括者」「分国支配の代行者」と表現されます。

他家との権益を巡る交渉というのはどういうことかということ、山内上杉氏の家来が持っている権益が、他家に所属している人との間でトラブルになる。享徳の乱の段階ですから例えば扇谷上杉氏に所属している人と、本人同士では解決がつかない場合、それぞれ親分に何とかしてくださいと頼むわけですね。山内上杉氏の方では家宰の長尾氏に案件があげられる、扇谷上杉氏の方では家宰を務めていた太田道灌に案件があげられる。山内と扇谷はこの段階では協同して足利方と戦っていますので、話し合いで問題を解決しようとしています。その時に前面に立って交渉し合うのが家宰同士、長尾景信と太田道灌が交渉して折り合いをつけていくのです。

今回の資料には掲げていないのですが、交渉の様子を示す史料があって、埼玉県史料叢書の中に入っています。ここでは景信が、太田道灌に相当激昂している様子がわかります。「この間この問題についてはこのように取り決めたにもかかわらず、太田道灌の方が勝手に違反しているのはどういうことだ」と言っています。景信の妹が太田道灌の妻ですから、二人は義兄弟の関係にあります。親戚関係にあるのですが、それぞれ主家を背負って立って交渉していますので、景信は自分が引けない、山内上杉氏の家宰を務めているのだから、その同僚の権益を守るのが仕事なのだと、道灌が約束を守っていないということに関して、非常に鋭く突っ込みを入れています。「この間言ったことを忘れてしまったのか」というように罵っているのです。それ位、親戚関係にあるにもかかわらず、前面に立って争いを続けるという立場にある。要するに自分達の同僚の権益を守る代表者という立場にあるのだということになります。

これが敵対関係同士になれば、戦争になるわけです。この時は山内と扇谷は協同関係にあったので、戦争にはなりません、それでもそれぞれの権益をめぐって激しい交渉が行われている。こういうことが一般的に起こりうる状況だったのだと思います。

このような立場でしたので、家宰というのは、主家の直轄領の管理、主家に収入が入る所領の管理などの大きな権益を持っていて、その権益を自分に繋がる同僚や自分の家来に配分する。山内上杉氏に収入が入ってくる所には全て代理人を立てます。その代理人はお手当が貰える訳です。大体収入の10%がその「代官」と呼ばれる代理人の収益になるのです。そうした代官の収益を全部自分の系列に分配するということになるわけですね。そしてそれによって大きな政治勢力を形成する。

特にこの景仲・景信というのは享徳の乱という戦争を行っていた中です。戦争の際には敵対する勢力の全てを没収します。その没収したものを配分するのが、家宰の立場にあった人、景仲・景信だったわけですね。この人達が自分に味方した、自分に協力をした同僚やあるいは自分の家来にそれを優先的に配分していくということになりますの

で、非常に大きな政治勢力を作り出していたということがわかると思います。

逆に、この家宰が別人に交代すると、どういうことが起きるかということ、その権益が全て別の勢力に移動するということになるわけですから、一種のクーデターになるわけです。その内部における主導権・勢力というのが全く逆転してしまう。

今の学生には全然わからない話なのですが、中選挙区の時代か、小選挙区になった頃だったか、今話題の徳洲会が、奄美大島で激しい選挙戦を展開しましたよね。徳洲会の系統ともう一つの対立があって、総選挙の度に入れ替わる。それに連動して公共工事を請け負う会社が全部入れ替わるのですね。そういう状況なのですね。そういう状況が家宰の交代には起こるといえることになります。

II 鉢形城構築の背景

<景信後継を巡る紛争>

続きまして2番目の「鉢形城構築の背景」に進みます。

文明5年(1473)、父親の景信が死去して、山内上杉氏は後任の家宰の指名という段階になります。当然、それまで景信に従っていた人達は、その跡継ぎである景春の後継就任を期待していたわけです。ところが山内上杉氏当主の顕定は違う人を指名します。

その際には長尾氏とは別の宿老の寺尾憲明、海野佐渡守(うんのさどのかみ)という人達が意見をしました。寺尾憲明は数代前からの宿老でしたので、おそらくその当時の山内上杉氏の家臣の中で最長老だったと思うので、相当な発言力が有ったと思われます。それから顕定の側近だった海野佐渡守。彼らは、景春の叔父さんの忠景(ただかげ)に受け継ぐのが良いという意見をし、顕定はそれを受け入れるということになります。

当時、景春の叔父さんの長尾忠景は、別の尾張守家という有力な長尾氏の一族を継いでいました。それから山内上杉氏の家臣の中の序列も、家宰に次ぐナンバー2だったのですね。その役職は武蔵国守護代ですから、武蔵の中の軍事リーダーを担当していたということになります。ですから(景春・忠景の)どちらを指名するにも理はあったのです。景信が死んだ後、それに次ぐ立場であった忠景を指名する、これは一つの見識になります。もう一つは景仲・景信と受け継がれてきたのだから、そのまま景春に受け継がせる、この二つの意見があったのですが、顕定は、忠景を後継の指名をするということになります。

それを受けて、景春方が収まらないのですね。景春の傍輩(ぼうはい)、これは同僚のことです、それから被官、景春個人の家来ですね、2~3千人いたという彼等が不満を持って景春を突き上げることになります。上杉の本陣であった五十子陣を封鎖して、食料が五十子陣に入らないようにする。五十子陣に軍勢は数千・数万といるわけですから、そこに食料が入ってこない、たちまち陣内は飢餓状態に陥ることになります。それを狙ったのです。五十子陣を封鎖するというのは、陣に繋がる道を封鎖することです。在陣している上杉方としては封鎖されてしまうと飢え死にになってしまうので、封鎖する景春方とそれを排除しようとする忠景方との間で小競り合いが起きています。

それから、景春から忠景に引き渡されるべき家宰が管理している所領というのがありました。家宰領は、本来景信が孫四郎家という形で管理していたので、そのまま景春に受け継がれていたのですが、家宰が忠景に移されたことを理由に、忠景方がその引き渡しを要求するということがありました。景春方がそれを拒否して、所々で紛争が生じる状況が見られるようになります。

何故そういう紛争が起きてくるのかという理由が、先程お話しした家宰の役割にあります。家宰は様々な権益を持っていましたので、家宰が景春の孫四郎家の手を離れると、同家に従っていた傍輩（山内上杉氏の家来・同僚達）・被官が、そうした権益を手放さなければならなくなってしまいます。彼等はそうした収益を見越して様々な生計を立てていたわけですから、突然全部無くなってしまうと、生活していけない、それぞれの進退の維持ができなくなりますので、個々にとって非常に重大な問題だったということなのです。

ですから、いわゆる景春派閥と言っていいと思うのですが、孫四郎家の系統・系列に属している人達は、自らの今の収益の維持をかけて景春を突き上げるというような状況にあって、五十子陣の封鎖などによって、顛定の判断を取り消させるといった行動をとったということになります。

会社などにも派閥があって、派閥が交代するとその系列の人はことごとく役職を外されるというようなことはよくあると思います。かつての自民党というのは非常にわかりやすい組織でした。今は派閥がないので、学生に説明するのも難しいのですが、田中派や福田派という派閥が権力やポストをどうやって取り合っていたかという話と同じなのだと思うのです。

一番牛耳っている人が変わると、そこが持っていた権益が全て別のグループに移ってしまうということですので、取り上げられる方からすると大変なことになるわけです。それを阻止すべく景春の同僚や家来達というのは五十子陣の封鎖ということで、デモンストレーションを行ったということになります。

<太田道灌の調停>

そこに太田道灌が調停に入ってきます。

景春の親戚筋、叔母婿に当たっていたので、要するに孫四郎家の娘婿という形なので、景春にとっての親戚という立場になります。

因みに、忠景は血縁上は同じ義兄弟になるのですが、忠景は孫四郎家とは別の家を継いでいますので、道灌はあくまでも景春の親戚という立場になるということです。

文明6年（1474）12月以前に、長尾忠景が正式に家宰に就任しています。12月に太田道灌が書いた手紙の中で、忠景に対して家宰職につけておめでとうと言っていますので、12月からはそれ程遡らない時期のことだったのではないかと思います。

ここで一つ気が付くことがあります。前任の家宰の景信が死んだのが前年の6月なので、忠景が正式に後継に就任したのは、景信の死後1年半位後になっているということです。その間、忠景方と景春方の綱引きといえますか、先程見たような五十子陣の封鎖など景春方の妨害行為というものもあって、中々正式に決定できないでいたところ、よう

やく顕定は、この段階になって忠景を正式に指名した、ということになると思います。

それに当って太田道灌が両勢力の和睦の仲介に乗り出しています。

道灌は、忠景が家宰になるのは仕方がない、但し忠景がそれまで就任していたナンバー2の地位に当る武蔵守護代という役職を景春に引き渡すということで調停・調整を働きかけています。

元々山内上杉氏の中では家宰がナンバー1でナンバー2が武蔵守護代でした。家宰を務めていた所が、後継ぎが居ないなどという場合には、それまで武蔵守護代を務めていた人が家宰に就任することになっていたのですが、その際には武蔵守護代を別人に譲っていたのです。ナンバー1の地位とナンバー2の地位を独占するということはありませんでした。ところが忠景はそれをしたのです。

それに対して道灌は、ナンバー2の地位を景春に譲り渡して、立場を入れ替えることで何とかお互いに納得をさせようとしています。

しかしこれについては、顕定・忠景方から拒否をされるということになります。これは顕定の判断でもあったのだと思うのですが、忠景はあくまでもナンバー1・ナンバー2を独り占めして、景春には一切の権益を渡さないということですから、相当強烈な敵対心を窺うことができるのではないかと思います。

そしてもう一つ、景春を五十子陣から退去させた方がいいという献策をします。

太田道灌はこのまま放っておくと景春の勢力が日に日に増して行って、五十子陣がにっちもさっちもいなくなり、結局は五十子陣が崩壊してしまうという危険を感じていたようで、早く五十子陣から遠ざけた方がいいというふうな献策をしています。

これは後に実現されるのですが、実現されたがゆえに景春は鉢形城を構築することになりますので、この時の太田道灌の判断というのは、果たして合っていたのかどうか。結果論からいうとミスであったと思われる。

太田道灌は、親戚として景春の地位をなるべく維持しながら両勢力の和解を進めようとしていたのですが、これが山内上杉氏に対して、具体的には顕定・忠景に対して不信感を抱かせることになります。道灌は景春の親戚なので、当然景春の弁護をするわけですから、そうした太田道灌の行動は、自分達よりも景春を優先するような行為だということで、顕定・忠景は不信感を抱くのです。そしてこの後、山内上杉氏の首脳と太田道灌の間では大きな溝ができていくことになります。

翌年、太田道灌は改めて両勢力の和睦のために、五十子陣の顕定の下に参陣しようとしています。ところが、参陣していく途中で景春は道灌の宿所を訪れます。その際に顕定を追討しようという意向を道灌に伝えて、それへの協力を要請することになります。

道灌はそれを拒否して顕定の下に参陣して、景春が謀反を起こそうとしているということを忠告します。しかし、顕定・忠景は相手にしないで、聞き入れず、何ら具体的な対応をとることはしませんでした。

今の私達だと、こうした顕定・忠景の行動というのは理解し難くて、謀反を起こすと言っているのだからすぐに討伐すればいいじゃないかと思うのですが、戦国時代は実はそうではないのです。謀反が具体的に形に現れてから初めて対応するというのが当時の感覚なのです。

例えば少々遠いですが、山口県周防国（すおうのくに）に大内という大名がいたのですが、その家宰の陶（すえ）がクーデターを起こします。陶の反乱というのは1年前から公然と言われていたのです。陶が味方工作をして固めていくのですが、当然それは大内に漏れるわけですね。1年位前から陶が反乱の準備をしているというのがわかっていて、公然の状況になっているのですが、主人の大内義孝が陶をいきなり誅拔するようなことはしないのですね。

おそらくこの当時の一つの考え方として、謀反が具体的に起されたら対応するけれども、噂の段階ではすぐに動くことはしないというのが一つの在り方としてあったのだらうと思います。

ですから顕定・忠景は景春が謀反を起こそうとしていると道灌が注進してきたけれども、具体的に相手にしなかったというのは、そういう当時の考え方に拠っているのだらうと思います。

翌文明8（1476）年3月、太田道灌は主家の都合によって、扇谷上杉氏の関係者である駿河今川氏の内訌への対応のために駿河に出陣することになります。

その隙を突く形で文明8年6月、景春は五十子陣を退陣して鉢形城を構築することになります。

道灌の献策に従って、顕定・忠景は景春を五十子陣から遠ざけることには成功したのですが、しかしそこで軍事拠点が構築されてしまったということになります。

なぜ鉢形城なのかということについてはまだ解明されていません。おそらくは景春の所領があったのだらうと推測しているのですが、そのこと自体はまだ確認されていません。今後の研究課題となっています。

景春の五十子退陣によって、おそらく顕定・忠景は景春が失脚したと判断したのだと思います。権力を牛耳るというのは、権力中枢にいるということになりますから、五十子陣から離れたということは、政権運営から離れたということですから、通常失脚と判断されると思います。ですから景春が五十子陣から離れて鉢形城を造ったといっても、要するに景春が政治的に負けたのだと顕定・忠景は判断したということでしょうね。この判断がこの後景春方に対しての強気姿勢に現れていくのですが、この強気の姿勢が反乱を直接生み出すということになります。

10月、道灌は駿河から帰陣しますが、それ以前に起きていた顕定・忠景との確執から、本拠の江戸城に在城したまま五十子陣には参陣をしませんでした。

12月になって事件が起きています。山内上杉氏の家宰の所領に武蔵の柴郷という場所があったのですが、そこの引き渡しをめぐる紛争が激化していくことになります。

景春が五十子陣を退陣した後ということですね。

この家宰領に当る柴郷という所は、家宰の交代に伴って景春から忠景に引き渡しされるべき所でした。ところが景春の被官、当時の用語でいうと中間（ちゅうげん）という人で下級の奉公人になります。その奉公人が一人、柴郷に在郷したままになっていたのです。ですから柴郷はそれを理由にして忠景への年貢納入を拒否していました。

家宰領は孫四郎家がずっと管轄していたので、孫四郎家の家来がその代理人として、その柴郷に在郷していて、年貢収納の際に、今年の年貢は私に払ってくださいと申し入

れ、それを柴郷も了解するという形で毎年払われていました。ところが途中から忠景が、柴郷は自分に権益があるから、私に年貢を払ってくださいと要求したのです。しかし柴郷側は、今現に景春の家来が自分の村に滞在しているので、あなたに払うわけにはいかない、あなたに権利があるというのであれば、その景春の家来を追い出してくれたらあなたに年貢を払いますと返答したようです。

この当時、年貢というのは、村側（ここでは郷と呼ばれています）が誰を領主と認めるかということによって決まっていた。山内上杉氏の公式の権利関係では忠景に移っていても、村が承認しない限り年貢は入ってこないのです。柴郷はあくまでも景春の家来が在郷していたので、景春を領主と認識している。だから、もし忠景が自分達に領主と認めてほしいのであれば、その景春の家来を追い出せと言ったわけですね。

これを受けて忠景は「合戦覚悟」で軍勢を派遣することになります。要するに景春の被官を追い出す。景春の被官はこの時一人ですが、争いというのは常に親類縁者が集まって集団の争いになります。被官は一人しかいないにしても、隣村に親類がある、あるいは知り合いがいる、というように色々な人達が集まってきて、たちまち大人数同士の争いになります。それを見越して忠景はそれなりの軍勢を用意して、中間一人を追い出そうとするのです。中間一人なのですが、その背景には様々な与同勢力が想定されていますので軍勢を派遣するということになります。

この時に景春の被官は抵抗しないで、そのまま柴郷から退去して、主人の景春がいる鉢形城に退去することになります。

このようにして忠景が家宰領の無理やりの引き渡しによって確保に成功したのが12月のことです。景春が蜂起するのは、その翌月になります。おそらく景春の五十子陣退去後、景春が失脚したのだと考えて甘く見た忠景方が、強圧的に権益の取り戻し、奪い取りを進めていったのだと思います。同様のことが各所であったのでしょうか。景春方の権益を持っている人達が皆（鉢形城に）逃げて行き、主人の景春を頼るということになって、その翌月、景春方の蜂起が起こったということです。

景春方は、奪い取られた権益を、再び力づくで取り戻すことが必要になり、そのための蜂起であったと考えられます。

それでは、ここで休憩に入りたいと思います。

————— 休 憩 —————

III 鉢形城をめぐる攻防

<長尾景春の乱の勃発>

前半の最後でお話したように、景春方は忠景方が強圧的な態度をとったことによって、権益の多くを取り上げられてしまった。それらの権益というのは彼らが身代を維持していくための重要な権益でしたので、維持していくためにはそれらの権益を確保しなければならない。力づくで取り上げられた権益なのだから、力づくで奪い返すということになります。その具体的な行動が、蜂起・反乱という形になるわけです。

それでは3番目の「鉢形城をめぐる攻防」に進みます。

このような経過を経て、長尾景春の乱と呼ばれる戦乱が勃発することになります。

文明9年（1477）正月、景春は上杉方の本陣の五十子陣を攻撃して、反乱を起こします。当時、五十子陣には主人の顕定、家宰の忠景、扇谷上杉氏の当主の定正（さだまさ）などの人々が在陣していたのですが、攻撃を受けて上野に敗走することになります。

景春は主人に対して敵対行動をとるわけですが、それでは名分的に良くありませんので、上杉方が対戦していた古河公方足利成氏（こがくぼう あしかがしげうじ）に支援を求めています。景春は、表向きを足利方の行動と位置付けることによって、主人に対する敵対という行為を覆い隠す行動をとっています。

五十子陣は崩壊して、顕定・忠景達の上杉方の首脳は全て上野に後退をしてしまいます。それに併せて景春に与同する勢力が一斉に蜂起していくのですが、その様相というのは山内上杉氏の勢力を二分するものでした。

レジュメに景春方に味方した有力な領主達というのを揚げておきました。冒頭に同族の長尾氏の中には、景春と忠景・足利長尾という三つの家系の長尾氏があると申しあげましたが、足利長尾は景春に味方しています。

長尾に次いで有力な宿老家の大石。大石も三つの家系があって、一つは下総（しもうさ）の葛西に拠点を置く大石、それから武蔵の二宮（東京都あきる野市辺り）に拠点を置く大石、もう一つは、この時はおそらく新座郡辺りに拠点を置いていて、後に八王子に移っていく大石。この三つの大石の内、葛西と二宮の二つの大石が景春に味方しています。

長尾では3家の内、景春と足利の2家、大石も3家の内葛西と二宮の2家が景春に味方しているということですから、山内上杉氏の宿老の勢力の中でも半分以上が景春に味方をしていることになります。

そして上野（群馬県）方面の家来の筆頭格に当たる長野氏も景春に味方しています。それから、別系統ですが武蔵の二つの長井氏。一つは利根川沿いの長井庄（ながいのしょう、行田辺り）に本拠を置く長井氏と、武蔵の梶田（くぬぎだ、八王子）に拠点を置く長井氏、この二つとも景春に味方をします。また行田の成田氏、江戸方面では豊島氏・毛呂氏、江戸近くの千葉実胤（さねたね）。相模（神奈川県）方面では金子氏・海老名氏・本間氏、それから甲斐（山梨県）の加藤氏という有力な領主たちが、全て景春に味方をしたのです。

ですから、これらの勢力が景仲・景信以降、景春の家系と密接な関係を結んでいた人々ということになります。

彼等が蜂起したことによって、山内上杉氏勢力というのは真二つに分かれてしまうことになります。したがって、この反乱が成功してしまうと山内上杉氏勢力そのものが崩壊してしまうという事態を引き起こすことになります。

3月から太田道灌は相模、武蔵南部の景春勢力の鎮圧を開始していきます。以後はこの道灌が景春に対する反乱鎮圧を主導していくことになります。顕定や忠景、扇谷上杉氏の当主も全て上野に逃げていましたので、上杉方の首脳の中で武蔵と南関東で健在だったのは太田道灌だけだったのです。

太田道灌は顕定・忠景との確執から江戸城に引き籠って、唯一離れた所に居ましたか

ら、扇谷上杉氏の家宰なのですが、事実上太田道灌が主導して景春反乱の鎮圧を進めていくということになります。

反乱鎮圧に当る際に、太田道灌は顕定に対して、景春に味方している勢力を寝返らせる際に「彼らが持っている権益をそのまま補償してほしい」という申し入れをしています。そして顕定は太田道灌のやり方を承認します。しかしここに一つ問題があるのです。彼らは忠景方から様々な権益を奪われていったために反乱を起こしたわけですが、その（奪われた）権益を保証するということは、当然、忠景方が既に配分しているものと抵触するわけです。結局その後どうなるかという、顕定は実行しないのです。

太田道灌がそれまでの権益を安堵・保証する形で寝返りを勧めても、既に自分の配下に配分してしまっている顕定は、寝返った者の権益を認めたくても認められないというのが実態でした。これが道灌と顕定の確執を拡大して、やがては太田道灌が謀殺される一つの大きな背景になったと考えられますが、それは後日の話です。

とにかく太田道灌は顕定の約束を取り付けて、景春方の鎮圧を進めます。

最初は太田道灌の居る江戸城の近く、扇谷上杉氏の勢力圏だった武蔵南部・相模で権益回復あるいは治安維持というのでしょうか秩序確保を進めていきます。扇谷上杉勢力圏の中から景春勢力を追い出した上で、次に北武蔵に転戦していくことになります。

北武蔵への進軍が5月から始まります。相模・南武蔵での勢力回復というのを果たした上で、今度は上野に避難していた上杉方の首脳を武蔵に迎え入れるために道灌は北武蔵に進軍していきます。

鉢形・五十子近辺というのは景春の勢力圏にあります。景春は太田道灌が進軍してきたので、その迎撃に当たっていくことになります。

そこで合戦になったのが「用土原」という所です。最後のページの地図をご覧ください。景春方の拠点になっているのはこの「鉢形」と「五十子」ということで、こちら辺は景春方の軍勢、景春の主力部隊が展開をしているところになります。

（地図の「用土原」を指しながら）この「用土原」という所で、太田道灌と長尾景春の合戦が行われることになりました。

この時、長尾景春は敗戦して五十子付近の富田（とんだ）辺りに後退することになります。ここでは上杉方でも有力者の死者が出ていますので、相当な激戦だったようですが、結果として景春方は負けて五十子辺りに後退をしたということになります。

2か月後の7月になって、古河公方足利成氏が、具体的な景春支援の行動をとるようになり、上野に進軍します。金山、新田庄（いずれも群馬県太田市）辺りまでが古河公方の勢力圏だったのですが、そこから更に上野の中央部、上杉方の上杉顕定や長尾忠景が避難していた前橋周辺に向けて、足利成氏が進軍を展開していくことになります。

上杉方は足利成氏の軍を迎え撃つだけの勢力はありませんので、上野の白井城に後退することになります。景春の反乱によって勢力の半分が景春方に付いていますし、各地ではそれをめぐって戦争が起きていたため、顕定の手元にいる軍勢というのは非常に少ないわけですから、成氏方の軍に立ち向かうことはできませんので、一旦白井城に後退します。

白井城というのは享徳の乱の段階では、越後上杉氏の前線拠点になっていました。

越後上杉氏が越後から関東に入ってくる際に、この白井城を拠点にしていたということになります。そこに上杉方はとりあえず避難をします。

太田道灌も足利成氏には対抗できないので、この時には主人達と合流して、皆で白井城に後退して体勢を立て直すということが考えられました。その後、上杉方は足利方への対戦のために白井城から出陣することになります。

景春はそれに対して成氏方の先陣を務めていますので、まさに景春が足利方としての政治的な立場を表現していたということがわかると思います。

翌文明 10 年（1478）正月 2 日、顕定の上杉方と、成氏の足利方は一転して和睦を結ぶことになります。その直前の 12 月 27 日、両勢力は前橋・高崎、高崎の辺りで決戦をしようと対陣していたのですが、たまたま大雪が降って決戦ができなくなってしまいました。大雪が降って移動が難しくなったということもあったのでしょうか、一転して和睦を結ぶことになります。

成氏は群馬県で対陣していたのですが武蔵の成田（地図の「忍」辺りを指す）に後退するということになります。

上杉方はその後、景春追討を展開していくのですが、ここら辺は中々微妙な問題をはらんでいます。景春はこの時足利方の立場をとっていました。しかし上杉方は、足利方と和睦をしても、景春は自分の家来だから足利方ではない別者である。景春の追討は自分の家中のもめ事を主人として解決するのだから成氏との和睦には拘束されないという判断に拠って、景春追討をその後も展開していくことになります。

2 月から 4 月にかけては、景春方の武蔵の小机城（横浜市）。ここは扇谷上杉氏の勢力圏なのですが、おそらく孫四郎家の権益があった地域だったので景春の家来が在城していたと思われます。その小机城をめぐる太田道灌との間で攻防が繰り返されることになります。

太田道灌が小机城を攻めに行くと、景春がそれを牽制して武蔵の中部まで進軍するというような形で攻防が繰り返されることになるのですが、結果としては武蔵南部・相模・甲斐の都留郡内などの南関東の景春勢力は、この段階で相次いで太田道灌に鎮圧されていくということになります。

数か月後の 7 月上旬、太田道灌は、景春と退陣を続けていた主人の扇谷上杉定正を河越城に帰陣させるために北武蔵に進軍しています。太田道灌が南関東の景春方の鎮圧をしている間、北武蔵の景春の軍勢には、主人の上杉定正が対峙していたのです。

顕定はどこにいたかという、まだ上野に居ます。顕定は総大将ですので自分の身の安全が確保されてから移動することになります。この時にはですね、群馬県の南部、藤岡辺りまでは進軍してきたようですが、総大将なので前線には立たない。景春に対しては扇谷上杉氏の定正が対峙していたのです。定正は景春に対峙しているので動けなくなっていましたので、定正を河越城に帰還させるためには上杉方の戦力を増強しなければならないことから、太田道灌が北武蔵に進軍していくことになります。

7 月 17 日、足利成氏は景春と断交することになります。

享徳の乱で京都の室町幕府は上杉方を支持していましたので、上杉方と対戦している

古河公方は、室町幕府に対する反乱者という位置付けをされていました。成氏はこの年の正月に上杉方と和睦する際、自分が反乱者の地位ではなく、関東公方であるということを幕府が承認するよう、上杉が幕府との和睦を取り持つことを条件にしていました。成田（行田市）に在陣していた成氏としては、本拠の古河に帰りたくても景春達が帰してくれなかったようです。そこで成氏は7月になって景春と断交をして、その討伐を上杉方に要請するということとなります。

足利成氏から景春を討伐しろと依頼を受けた太田道灌達は、翌日に景春への攻撃を行うこととなります。景春はここでも負けてしまいます。具体的にどういう経路で逃走したのかはよくわかっていないのですが、おそらく秩父郡・児玉郡の方に逃走したと考えられます。

また鉢形城については、景春方が敗走したということで落城することとなります。

行田の辺りで上杉軍に負けた景春は、そのまま秩父郡・児玉郡方面に逃れていき、それに連動して鉢形城も落城をしたと考えられます。

秩父郡・児玉郡は、景春の乱の際には景春方の勢力圏に入っていたようですので、自分の勢力圏に避難をしたということになると思います。

景春が退散したことで、ようやく群馬にいた上杉顕定が武蔵に戻ってきます。

武蔵に戻った顕定は、この鉢形城に入城します。以後、顕定は死ぬまで鉢形城を本拠として、更にその跡継ぎの顕実（あきぎね）が滅ぼされるまで、山内上杉氏の本拠になっていました。

山内上杉氏というのは、この当時関東のナンバー2 の存在だったとともに、関東西部の中心人物になります。五十子陣が崩壊した後、その山内上杉顕定の本陣をどこにするかという中で、この鉢形城が選択されたこととなります。

そして、顕定が鉢形城を本拠にするようになったのは、実は太田道灌が献策したものだと書かれています。道灌は、武蔵・上野の両国を治める場所として、鉢形城が重要な所だという理由で、顕定に鉢形城を本拠にすることを薦めています。

太田道灌はこれ以降の山内上杉氏が、武蔵・上野を支配することを前提に、そのためには今ある軍事拠点の中で、五十子ではなくて鉢形が適当だという判断をし、それを薦めたということになるわけです。

因みに、以後、顕定は「鉢形様」と呼ばれていくようになります。鉢形を本拠にしているお殿様という意味で「鉢形様」ということですね。

<乱の終息>

この文明10年(1478)12月から翌11年(1479)7月にかけて、太田道灌は一転して、下総千葉氏攻めを展開しています。下総千葉氏は元々足利方の有力者だったのですが、景春の反乱に対しては、景春が同じ足利方になったということで積極的に支援して、景春の有力な味方勢力になっていました。

実はこの下総千葉氏は、当時太田道灌と鋭く対立していましたので、太田道灌が一生懸命景春方の勢力を鎮圧しているのです、その景春方を積極的に支援したという状況を捉えることができると思います。

この下総千葉氏攻めについて、道灌がある程度成功を収めた頃の文明 11 年閏（うるう）9 月、今度は景春が秩父郡から進出して、児玉郡で再び蜂起することになります。

11 月には、景春を攻撃するために太田道灌はまた北武蔵に進軍します。景春方が拠点にしていたのは「長井城」と呼ばれていますが、児玉郡にある城でしたので、おそらく「御嶽（みたけ）城」（金鑽御嶽城、神川町）のことだと判断できます。それを攻撃するために太田道灌が再び北武蔵に進軍をしています。

翌文明 12 年（1480）1 月になって、景春は武蔵の越生に進軍しますが、扇谷上杉方の軍勢に敗北をして、そのまま秩父郡に後退しました。その結果、御嶽城は上杉方の攻撃によって落城してしまうことになります。

これによって景春の勢力は、全く秩父郡に閉じ込められてしまう状況になります。

翌 2 月から古河公方の足利成氏は、室町幕府との和睦交渉に乗り出します。本来は和睦の条件として上杉方が仲介するはずだったのですが、上杉方が仲介してくれなかったため、景春を上杉長棟（ちょうとう）の代理という形にして、幕府との交渉にあたらせていきます。上杉長棟というは*上杉憲実（のりざね）のことです。

※ 顕定の 3 代前、成氏の父持氏（もちうじ）の代の関東管領。

景春が足利成氏の代理人のような立場になっていますので、当時世間からは、依然として景春が上杉方の有力者で政治勢力を持っている人物と認識されていたことが、窺えると思います。

しかし景春は、当時の室町幕府との間に有力なコネがなかったようで、この交渉はうまく進みません。

5 月になって、顕定はいよいよ景春勢力を殲滅するために秩父郡に進軍します。色々あるのですが、結局 6 月に太田道灌も秩父郡に進軍することになります。この時景春は拠点にしていた秩父郡の日野要害という所に籠城していたようです。

6 月 24 日、その日野要害を太田道灌は攻略します。

その後しばらくは景春の動向は不明になりますので、景春はここで没落して、秩父郡から出て、以後は足利成氏を頼るということになると考えられています。

10 月、成氏はもう一度景春を中心にして幕府との和睦交渉にあたっています。しかし結局このルートは失敗をしてしまう。父の景信までは室町幕府との間に有力なネットワークがありましたが、政治的に有力な立場に立つ前に反乱を起こしている景春自身にはそれが無かったのです。有力な家系を継いではいませんが、具体的な政治交渉経験もなかったためか、結局幕府関係者を動かすまでには至らずに、この和睦工作は失敗します。

その後成氏は、景春では埒が明かないため、上杉方の中心人物である越後上杉房定（ふささだ）という顕定の実父に仲介を依頼して和睦交渉を進めています。本来この交渉は顕定が取り持つべきところ、顕定が取り持たなかったために、その父親である越後上杉氏に依頼をしたということになります。この辺りは、顕定が成氏に対してどのようなスタンスをとっていたのかを窺うことができる事柄になるかと思えます。

少々余談になりますが、この和睦交渉を顕定が進めないことに対して、成氏の弟で有名な文化人でもある熊野御堂守実（くまのみどうしゅじつ）という人が江戸城の太田道

灌のところまで乗り込んでいます。太田道灌は、成氏との和睦を進めるために守実が来たことを顕定の下に連絡するのですが、顕定はそれに対して返事も出さなかったようです。この辺りから、顕定は成氏との和睦に対しては頑なに拒否していたような雰囲気を感じることができるのではないかと思います。

秩父郡から没落した後、暫く動向が不明だった景春ですが、単に没落しただけではなく、依然として対顕定という行動をとっていたようです。翌文明 13 (1481) 年 4 月に、顕定の養子になっていた「憲房 (のりふさ)」という人を擁立して顕定方に対抗するというような行動をとっています。(上杉氏系図を指しながら) 憲房というのは顕定の先代の関東管領上杉房顕の甥に当り、ちょうどこの時が元服直後位だと思われます。

景春が反乱を起こした際は、足利方という立場をとることによって、顕定に対抗していたわけですが、成氏が顕定と和睦してしまったので、今度は顕定に代わる山内上杉氏当主を擁立するという立場に戦略を変えているということが窺えると思います。

顕定に代わって憲房を山内上杉氏の当主に据えるという形で名分を整えて、顕定に対抗していくというように路線変更を行っているようです。但し、具体的な状況については、現在これ以上はわかっていません。今後この辺りの関係資料の分析が詳しく進むともう少し具体的な状況というのがわかってくるかもしれません。

翌文明 14 年 (1482) 11 月、都鄙和睦 (とひのわぼく) が正式に成立します。都 (みやこ) というのは室町幕府、鄙 (ひな) というのは古河公方を指しています。先ほど触れたようにその仲介者は越後上杉氏になります。これにより、上杉方と足利方が戦った享徳の乱は終息を見ることになります。

その直前に憲房を擁立して対抗していた景春ですが、憲房はこの都鄙和睦を契機に再び顕定の元に戻ってしまいます。この後景春は単独での行動はとらなくなり、成氏に従うということになります。

その 4 年後の文明 18 年 (1486) 7 月、太田道灌が主家の扇谷上杉定正に殺害されたことをきっかけに、この後今度は山内と扇谷の両上杉氏の対立が展開していくこととなります。この後も景春の活躍は見られるのですが、既にその時の景春の立場というのは、特定の地域を支配しているような領主ではなく、扇谷上杉氏に雇われるという傭兵隊長のような形になっていきます。

この後も景春は、顕定に対して相当の敵対心を抱えながら、一貫して対顕定という立場を貫いていくのですが、それはまた機会があればお話しさせていただきたいと思います。

本日は、長尾景春と鉢形城との関係を中心にお話をさせていただきました。

ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

————— (講演は以上、質疑応答に移る) —————

【質疑応答】

Q 1. 鉢形城と少し離れるのですが、五十子陣が健在の時分に連歌師の宗祇が、吾妻問答（あづまもんどう）などを景春に与えたというか送ったというのを見ましたが、本当ですか？

また、景春の連歌の作品というものはあるのですか？

A 1. はい。今ここ（鉢形城歴史館）に資料が出ています。

景春の連歌については、詠んでいないわけではないのですが、現在のところは確認されていないと思います。太田道灌などについてはそれなりに残っているのですけれど、この時代の東国・関東関係のものは、それほど残っていないのです。但し、国文学の方面では、戦国時代のものの研究が随分と進んできていて、色々な史料が見つけれられるようになってきていますので、もしかしたら将来出てくるかもしれないですね。

Q 2. 顕定が景春に跡を継がせなかったのは、景春の実力を恐れたということでしょうか、それとも道灌が言うように器量がなかったということでしょうか？

A 2. 顕定に聞いてみないとわからないですね・・・。

ただ、顕定は養子として迎えられていて、それを擁立したのが景春の勢力ですから、やはり煙たかったのではないのでしょうか。顕定はこの段階でかなり成長（22歳）してきているので、自分でリーダーシップをとりたいと思うようになっていたことも考えられます。そのためには、景春が家宰を継いで、それまでどおり言い成りになることを嫌だと思ったのではないのでしょうか。

ただ、その代償はあまりにも大きかったと思いますよね。

Q 3. 先程、児玉郡の御嶽城を長井の城と比定されているようですが、その根拠について少し詳しく伺えますか？

周辺には他に長井の城といえる候補はなかったのでしょうか？

A 3. 長井城を攻めるために、道灌が金鑽神社に在陣していましたので、そこに在陣して攻める城というと御嶽城しか考えられないのではないかと考えています。

その後は御嶽城が児玉郡の地域拠点になりますし、秩父・児玉辺り進出しての拠点ということですから、御嶽城ではないかと思っています。

（拍手）

————— （以 上） —————